栗ヶ沢バプテスト教会　2025-07-20 主日礼拝説教

「祈りの精神」ルカ 11：3-9　木村一充牧師

主イエスがある所で祈っておられた時、弟子の一人がその祈りが終わるのを待ちかねていたかのようにこう求めました。「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」ここで「祈りを教えてください」と訳される「祈り」は、原文のギリシャ語は名詞形ではなく、動詞の不定形、すなわち不定詞が使われています。祈るという行為、行動を教えてほしいとこの弟子は求めたということです。この弟子の願い求めは、今のわたしたちにもあります。なぜなら、わたしたちも何をどのように祈ったらよいか、分からなくなることがあるからです。8 月に小学科の夏期キャンプがおこなわれる予定ですが、子どもたちに祈ることをお願いすると、しばしば返ってくる応えが次の言葉です。「え一、いやだ。祈りたくない！」そのような返事を耳にするとき、わたしたちは考えなければなりません。それは、そもそも祈りとは何なのか。なぜ、わたしたちは祈るのかという根本的な問題です。

祈りとは何か、という問いに対して最初に答えた人物と見られている人が、紀元 2 世紀半ばから 3 世紀の初めにかけて活動した教父であるアレキサンドリアのクレメンスという人でした。この教父は「祈りとは、神との会話である」と定義した人物として知られています。今でも、祈りを神との会話だと考える人は少なくありません。本日の礼拝に集うわたしたちの間でも、そう思っている人がいるかもしれない。しかし、ここで一つ疑問が生じます。祈りがわれわれと神との会話であるならば、両者がたがいに語り合うことになります。われわれが、神に向かって何かを語り、何かを願い求める。すると、これを聞かれた神が答えられる。つまり、神がわれわれの祈りに応え、われわれの祈りを聞き入れてくださる。これが無ければ会話とは言えません。ところが、現実はどうでしょうか。われわれの語りかけに対して神は、いつもこれに応えてくださると言えるでしょうか。この点に関して、わたしの思うところを正直に申し上げます。われわれの祈り願いについて、神が直ちに応えてくださる、あるいは願い求めを聞き入れてくださるという事例は、決して多くはないということです。いや、むしろその逆ではないか。われわれが何度も繰り返して願い求めている祈りのテーマであるにもかかわらず、神の側で、一向にこれに応えてくれないことがいくつもある。その時、わたしたちはどうするのでしょうか。神さまなんて、少しも私の祈りを聞いてくれない、わからず家だ。ばかばかしい。祈ることなど今後絶対にするものか、と言って神に背を向けるのでしょうか。しかし、わたしたちは決定的に大切なことを心に刻まねばなりません。それは、祈りにおいて第一の地位を占めるのは、われわれではなく、主なる神であるということです。我々の方から先に語りかけるよ

りも、むしろ神が先に語られているということです。われわれは神の言葉によって造られた存在なのです。だとすれば、われわれが第一になすべきことは、語ることではなく聞くことです。祈る前に聞かねばならない。

わたしは、昔ある先輩の信仰者の方から、その方の高校生の頃の体験談を伺ったことがあります。ある時、その方が通っていた教会が、日本基督教団の鈴木正久という有名な牧師を特別伝道集会の説教者として招いたことがあり、その人の話を土曜日の夜に聞きにいったというのです。そのころ、特伝といえば、土・日の二日間にわたっておこなわれるのが当たり前だったといいます。その夜、鈴木牧師が語られた説教のテーマが、「祈り」でありました。鈴木牧師は、「求めよ、さらば与えられん」という主イエスの言葉を信じて、あるとき川の上の橋の上から川に向かって祈ったというのです。「神様、あなたがまことに全能の方であられるなら、この川の流れを上から下にではなく、下から上に逆に流れるようにしてください」と。鈴木牧師は、橋の上でひざまずき、何時間も神さま、あなたは奇跡を起こされるお方です。どうか、川の流れを下から上に流れるようにしてください」と懸命に祈ったという。しかし、数時間の祈りもむなしく、川の流れは上から下のまま、一向に変わりませんでした。鈴木牧師は、失意のうちに立ち上がってそこを去ったといいます。しかし、あとから、考えてみると、自分のあの時の祈りは間違っていたことについた。なぜなら、この川の川下には恵みの水を待っている大勢の町の住民、農家の人々がいるのだ、ということに気が付いたというのです。その先輩は今でも、高校生の時に聞いたあの鈴木牧師の話を忘れることができないと、わたしに話してくれました。

このことから思わされること、それはわたしたちが祈る時、自分のほしいものを要求するあり方から、神のみ心を知り、神のみ心が成るように祈るあり方へと転換しなければならないということです。ただ、神のみ心が、今の時点ではわたしたちに分からない、ということがあります。だから、神のご意志を知るために、わたしたちは、粘り強く祈るのです。たとえ、祈りがすぐに聞かれなくても、失望してはいけません。考えてみてください。植物でさえ、種を蒔いてから実を結ぶまで、何年もかかるのです。まして、人間に関する事柄であれば、植物以上に長い時間がかかるのではないでしょうか。なぜなら、植物は、自然の流れの通り育ってくれます。しかし、人間はそうはいきません。自己主張があり、その人の意志や価値観があり、思惑があります。だから、人と人との関係のことを祈る場合、わたしたちは、まず初めに、罪の赦しを祈らなければなりません。今年の8月2週に平和祈念礼拝をささげます。さらに、当日の午後3時より東ブロック4教会合同の「平和祈念祈祷会」の開催を予定しています。なぜ、国と国との間で、争いや戦争が繰り返されるのか。それは、それぞれの国が正義を主張してい

るからです。しかし、その正義は不完全な正義です。お互いの利害や損得勘定、何よりも自分の国の利益、という要素が色濃くそこに入り込んでいます。正義を唱えながらも、そのなかに、エゴイズムの問題が入り込んでいる。罪の問題が入り込んでいるのです。そのような利害関係にある国どうしで、互いの赦しや和解の出来事が起こるように、懸命に祈りたいと思うのであります。

二つ目に覚えたいこと、それは、祈りは一人でささげるものではないということです。もちろん、人には話すことのできない個人の祈りがあることは否定しません。マタイによる福音書6章6節でも、「祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい」と書かれており、いわゆる「密室の祈り」が推奨されています。しかし、祈りはそれがすべてではありません。なぜなら、使徒言行録の1章をみてください。ここでは、イエスが天に挙げられた後、母マリアを中心にしてあの2階の部屋で、120人の弟子たちが心を合わせて熱心に祈っていたと書かれています。この「心を合わせて共に祈る」という教会のわざを通して、ペンテコステの出来事がおこりました。祈りは、個人的な行為であるとともに、教会というキリストの体に繋がる者が、お互いを気遣い、互いのことを祈り合うという共同の行為、パブリックなわざであります。個人の祈り、教会の祈りも、どちらも大切であります。

祈りという行為が、自分だけの事柄ではないということを示す一枚の絵を、この朝わたしは皆さまと分かち合いたいと思います。ここに一枚の絵があります。（このとい、講壇から、会衆席にむかって提示する）　皆さま、この絵をご覧になったことがあると思います。これは、デューラーというドイツの画家が描いた「祈りの手」という題の版画です。この祈りの手の誕生には、ある言い伝え、エピソードがあると言われます。デューラーには、若き時代、ともに画家を目指している親友がいました。ところが、二人とも貧しくて絵の勉強をするお金がありません。このままでは、夢をあきらめなければいけないと思った二人は、お互いに相手のために肉体労働をして、修業期間中のお金を出し合おうと決めました。まずは、友人のほうが数年働き、そのお金でデューラーは絵の勉強に精を出し、まもなく画家として名を上げることができました。デューラーは、喜び勇んで友人に会いに行き、今度は僕が働き、君が絵の勉強をする番だと言いました。ところが、彼はデューラーに、自分の荒れくれだち、ごつごつになった手を見せ、このとおり自分はもう繊細な芸術にたずさわる手ではなくなってしまった。だから、ぼくはもういい。君が僕のぶんまで頑張ってくれと言ったというのです。この友人の言葉に感動したデューラーは、お礼に君の手を書かせてくれと言って、この絵を描いたといいます。二つの手を合わせているだけの、シンプルな、この絵が、なぜ人々の心をとらえるのでしょうか。それは、まさにそのシンプルさ、

合掌した二つの手という局部性のゆえではないでしょうか。この祈りはだれが祈っているのか。どこで祈っているのか。どのような思いで祈っているのか。これだけでは計り知れず、それらは想像するしかありません。しかし、そこのこの絵の魅力があります。つまり、この絵には、わたしたちの想像力（イマジネーション）を掻き立てる力があるのです。

三番目に申し上げたいことは、「なぜわたしたちは祈るのか？」ということです。あらゆる宗教に、祈りがあると言われます。しかし、聖書がとく祈りは、キリスト者にとって、あってもなくてもどちらでもよい、というものではありません。いや、キリスト教信仰の核心部分をなすものです。わたしたちをキリスト者たらしめるもの、それが祈りであると言って良いほどです。なぜでしょうか。それはもし祈らなければ、わたしたちが傲慢になるからです。聖書がいう罪とは、刑法が定める犯罪のことではありません。罪とは、神から離れ、神を無視して自分の力によって生きようとする生き方のことを指しています。ちょうど、エデンの園でエバが「この木の実を食べたら、あなたの目が開け、神のようになれます」という蛇の誘いを聞いて、神のようになろうとした。そうして罪を犯したのと似ています。神に信頼して生きるのではなく、自分の力によって生きる。或いは、この世の力に頼って生きようとする。そのような生き方から、神を中心として、神の導きによって生きる生き方へと、引っ張ってゆく力が、祈りにはあります。だから祈るのです。

祈ることで、わたしたちは、神の前に自分が小さな存在であり、取るに足らないものであることを知らされます。その、取るに足りないわたしたちが、祈ることで、神と隣人を愛して生きるように整えられるのです。祈りは、わたしたちの心を神に向けてくれる、大きな恵みの賜物であります。

お祈りいたします。